

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500656

研究課題名(和文) 活動を用いて認知症者のBPSDと介護者の心理的負担軽減を図る訪問プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Home-based program to decrease BPSD and care burden for people with dementia and caregivers to use activities

研究代表者

西田 征治(Nishida, Seiji)

県立広島大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：90382382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、在宅認知症者とその家族介護者に対して、認知症者の特性に応じた活動を提供するとともに、介護者にその監督・支援技能を指導すること、また、家族介護者の困りごとや認知症者に期待することを改善するよう取り組むことで、認知症者の行動心理症状の改善と介護者の心理的負担の軽減を図れるかを検証することだった。訪問は週1回8週間を基本とした。本プログラムを完遂した9組を分析した結果、本訪問プログラムは認知症者の行動心理症状を有意に軽減し、介護者の困りごとや認知症者に期待することを有意に改善することが示された。家族介護者の介護負担感は軽減傾向にあったものの、有意な変化は認められなかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to discuss whether a home-based program could improve behavior and psychiatric symptoms of dementia (BPSD) and decrease the care burden of family caregivers or not. The program basically consisted of eight sessions once a week. We facilitated persons with dementia to engage with meaningful activities and give family caregivers advice on how to supervise their activity performance. That program also included trying to solve caregivers' concerns regarding their care. Nine dyads completely performed this program. In the results of analysis of their data, we found that this program significantly decreased BPSD and improved family caregivers' concerns regarding their care. Though the burden of family caregivers tended to decrease, there was no significant difference.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：人間医工学・リハビリテーション科学・福祉工学

キーワード：認知症 訪問 BPSD 介護負担 作業療法

### 1. 研究開始当初の背景

我々はデイケアに通う在宅認知症者の家族介護者に対して心理教育的プログラムをベースにした相談支援が介護者の心理的負担の軽減を促すことを実証する研究を行ってきた。その中で家族介護者の心理的負担を軽減するためには、単に心理社会的な支援だけでは限界があり、認知症をもつ当事者への関わりを含めた支援が必要であることが明確となった。国外では、在宅認知症者と家族の両者に介入を行う訪問リハビリテーションが行われるようになってきており、そこでは認知症者にとって日常の重要な活動を同定し、それを支援する直接的な介入とその監督技能を家族に指導する試みが始まっていた ( Laura et al. Gerontologist 2009 )。

国内では認知症者に対する訪問リハビリテーションは、身体障害を併発し日常生活に支障が出ている者に対して身体機能や動作の訓練が主体に行われており、身体障害のない認知症者に対しては訪問リハビリテーションが殆ど行われていない状況だった。我が国において国外で試みられているように、認知症者にとって重要な活動を支援する訪問プログラムを実施することで在宅の認知症者とその家族介護者の生活の質を高められるかを検証することは重要な課題の一つと考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、在宅認知症者とその家族介護者に対して、主たる生活場所である在宅での直接的な両者への介入に着目し、認知症の当事者に個人の特性に応じて仕立てられた活動を提供するとともに、介護者にその監督および支援技能を指導すること、また家族介護者のニーズを満たす取り組みを通して、認知症の行動心理症状 ( 以下、BPSD ) の改善と介護者の心理的負担の軽減など心理面に良い影響を与えることを検証することだった。

### 3. 研究の方法

#### 対象者

研究フィールドを広島県 A 市、佐賀県 B 市とし、それらの地域包括支援センターから研究対象となる在宅認知症者とその家族介護者を紹介してもらうこととした。対象者の適格条件、除外条件は以下の通りであった。

適格条件：認知症者は、60 歳以上で認知症の症状を有すること、見守りで食事が可能なレベルの認知能力があること。家族介護者は、介護上の困り事を有すること、在宅介護に意欲的であり継続する意思があること、同居または近隣に住み週 3 回以上の介護を行っていること。

除外条件：認知症者の除外条件は、統合失調症や双極性障害の診断を有することであった。

#### 訪問プログラム

週に 1 回 8 週間の訪問による介入を基本とし、必要に応じて延長または短縮する。最初の 1, 2 回目の訪問で以下のアセスメントを行う。

- ア. 認知症者の生活状況、作業歴 ( 過去や現在の趣味、興味、職業 ) やしたいことを認知症者と家族から聴取する。
- イ. 困りごと、認知症者に期待すること、認知症者がより健康になるためにすると良いと思う活動を COPM ( Canadian Occupational Performance Measure, カナダ作業遂行測定 ) を使用して家族介護者から聴取する。
- ウ. 認知症者の BPSD, 介護負担を家族介護者から聴取

これらのアセスメントを通して、当面認知症者と取り組む活動を特定する。また、解決を目指す家族介護者の困りごとを特定する。

3~7 週目には、初期のアセスメントで特定した活動を実施するとともに、更に認知症者にとって楽しみや健康を促進する大切な活動を探索していく。家族介護者には、作業療法士が認知症者に活動を支援している様子を見せながら、活動の遂行を促す支援技術やコミュニケーション方法を指導、助言する。それらの支援技術にはリマインドカード、手掛かりの提示や枠組み設定などが含まれ、コミュニケーション方法には認知症者の行為を褒めたり、ねぎらいや感謝したりすることが含まれる。8 週目は介入効果を検証するために初期と同じアセスメントを実施する。

#### 介入者

介入は原則として認知症領域での臨床経験を有する作業療法士が行うものとする。全ての介入者は介入を実施する前に研究代表者から本研究の目的と介入方法について説明を受け、その後、実際に同行訪問することにより介入方法を学ぶ。介入者は研究対象者のアセスメント、介入の経過を随時報告し、研究代表者から助言を受けることとする。

#### 成果測定

成果測定には、以下のものを用いる。

- BPSD : 日本版 NPI ( Neuropsychiatric Inventory )
- 介護負担感 : Zarit 介護負担尺度
- 介護者のニーズ ( 認知症者に期待することや困りごと ) の遂行度と満足度 : COPM

#### 分析方法

日本版 NPI, Zarit 介護負担尺度, COPM の介入前と介入後の測定値をもとに有意な変化が認められるかをノンパラメトリック検定により検証する。有意水準は 5% 未満とする。

#### 倫理的配慮

本人および家族介護者に本研究の目的を

口頭および文書で説明し、同意を得たうえで研究を実施する。認知症により本人にインフォームドコンセントを適切に実施できない場合は家族介護者に代諾者として同意を得る。研究に不参加であっても不利益を生じないこと、一旦研究に参加した場合でも途中で辞退できることを説明する。

#### 4. 研究成果

介入研究の実施期間（2012年2月～2014年3月）を通して研究の同意が得られた対象者は11組で、そのうち介入を完遂できたのは9組だった。認知症9名の男女比は5:4（男性：女性）で、平均年齢は79.2歳（範囲：67歳～97歳）だった。CDR（Clinical Dementia Rating）の平均は1.3（範囲：1～2）だった。認知症のタイプにはアルツハイマー型認知症（4名）、脳血管性認知症（1名）、その他（4名）が含まれていた。家族介護者の属性は、配偶者（4名）、実子（3名）、孫（1名）、義妹（1名）だった。平均訪問回数は8.9回（範囲：8～13回）だった。

取り組まれた活動には、回想活動、歌・音楽鑑賞、写真アルバム整理、メモリーブック作り、彫刻、ゴルフ、マージャン、料理、花見、ガーデニング、散歩、編み物などが含まれた。家族介護者のニーズや認知症者に期待することには、活動的な生活をする、楽しみを見つける、外の人と交流する、笑顔で過ごす、もっと入浴する、スムーズに着替える、適度な量の食事を摂る、失敗せずに排泄するなどが含まれた。

本プログラムを実施する前と後の成果指標の平均値（標準偏差）を表1に示す。BPSDをアセスメントする日本版NPIは有意に低下し、その中には、無関心、妄想、興奮などが含まれていた。家族介護者のニーズや認知症者に期待することをアセスメントするCOPMの遂行スコアと満足スコアは有意に向上していた。しかし、介護者の心理的負担感をアセスメントするZarit介護負担尺度は低下していたものの有意差は認められなかった。

表1 プログラム前後の成果測定の結果

測定項目	介入前	介入後	P値
日本版 NPI	18.4 (9.8)	7.7 (6.4)	0.01
Zarit 介護負担尺度	44.0 (19.5)	36.7 (22.8)	0.09
遂行スコア	2.7 (0.9)	6.3 (1.8)	0.01
COPM	2.8 (1.1)	7.1 (1.4)	0.01

表中の数値は平均得点（標準偏差）を表す。

これらの結果から、活動を用いた本訪問プログラムによって家族介護者の介護負担感の軽減を図れることは示されなかったが、認知症者のBPSDを軽減し、介護者のニーズや認知症者に期待することが改善されることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

西田征治, 高木雅之, 近藤敏, 上城憲司, 坂本千晶, 興味ある活動との結びつきを促す訪問作業療法により娘と共に元気を取り戻した認知症の女性例, 認知症ケア事例ジャーナル, 査読有, Vol.7, No.1, 2014, in press

馬場美香, 西田征治, 高木雅之, 近藤敏, 上城憲司, 認知症者に対するクライアント中心の訪問作業療法, 作業療法, 査読有, Vol.32, No.4, 2013, pp.390-396

高木雅之, 西田征治, 近藤敏, 上城憲司, 馬場美香, 在宅認知症高齢者と家族介護者に対する訪問作業療法の効果 - COPM, AMPS, GAS を用いて 認知症ケア事例ジャーナル, 査読有, Vol.5, No.2, 2012, pp.93-99

仙波梨沙, 上城憲司, 田平隆行, 西田征治, 原口健三, 認知症と手段的ADLに関する文献研究, 日本作業療法研究学会雑誌, 査読有, Vol.15, No.1, 2012, pp.7-12

仙波梨沙, 上城憲司, 田平隆行, 西田征治, 納戸美佐子, 中村貴志, 地域在住高齢者における財布動作と認知機能の関連 いい老後 (1,165)テスト, 精神科治療学, 査読有, Vol.27, No.11, 2012, pp.1477-1482

西田征治, 近藤敏, 西村玲子, 宮口英樹, 上城憲司, 認知症者の生産的作業の遂行を促進する支援技術に関する研究 熟練作業療法士へのインタビューを通して, 広島大学保健学ジャーナル, 査読有, Vol.10, No.1, 2011, pp.6-13

〔学会発表〕(計4件)

Seiji Nishida, Mika Baba, Masayuki Takagi, Satoshi Kondo, Kenji Kamijo, Occupation-focused home-based occupational therapy for the elderly person with dementia and the caregiver, 16th WFOT Congress, 48th JAOT Congress, Yokohama, 2014

Mika Baba, Seiji Nishida, Masayuki Takagi, Satoshi Kondo, Kenji Kamijo, Experience of home-based occupational therapy for an elderly person with

dementia and apathy: A Case who could engage with meaningful occupations, 16th WFOT Congress, 48th JAOT Congress, Yokohama, 2014

西田征治, 高木雅之, 近藤敏, 上城憲司, 活動を用いた訪問介入により娘と共に元氣を取り戻した独居の軽度認知症の女性, 第15回日本認知症ケア学会, 東京, 2014

西田征治, 近藤敏, 宮口英樹, 西村玲子, 上城憲司, 認知症者の作業遂行を促す支援技術に関する研究, 第45回日本作業療法学会, 大宮, 2011

〔図書〕(計1件)

宮口英樹監修, 小川真寛, 西田征治, 内田達二編集: 認知症をもつ人への作業療法アプローチ: 視点・プロセス・理論・メジカルビュー社, 2014, 235

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西田 征治 (NISHIDA, Seiji)  
県立広島大学・保健福祉学部・准教授  
研究者番号: 90382382

### (2) 研究分担者

近藤 敏 (Kondo, Satoshi)  
県立広島大学・保健福祉学部・教授  
研究者番号: 70280203

上城 憲司 (KAMIJO, Kenji)  
西九州大学・リハビリテーション学部・准教授

研究者番号: 90454941

高木 雅之 (Takagi, Masayuki)  
県立広島大学・保健福祉学部・助教  
研究者番号: 90468299

西村 玲子 (NISHIMURA, Reiko)  
県立広島大学・保健福祉学部・助教  
研究者番号: 10503104

### (3) 連携研究者

小川 敬之 (OGAWA, Noriyuki)  
九州保健福祉大学・保健科学部・教授  
研究者番号: 50331153